

精霊たちの棲む大地

山を染める精霊



lyric by aono

photo by hiros



私が渡った湿原は 既に秋の色に染まりはじめ

私に季節のあいさつを 送っているようだ

湿原を渡る精霊の 言葉に従い私は行く

昔登ったあの山を 目指して私は歩いている

あそこに見える岩山の その向こうに見えるはず

美しく染まった木々の葉を 横目で見ながら私は進む



この山を越える前に 山を染める精霊に会えるだろうか

湿原を渡る精霊は 私に冬になったらあの山へ行けと

恋人と登ったあの山へ行けと 私に言った

赤や黄色に染まった木々の間を 私はただ黙って進む

人間が精霊に会えるなんて奇跡だと

何か理由があるのだと 湿原の花が驚いていた

もしもほんとにそうならば 私は知りたい そのわけを



心細さも手伝って 私の歩みは遅くなる

湿原に入って どのくらい経ったのだろう

夏は終わり 秋が来て やがて冬になるその前に

あの思い出の山まで たどり着けるだろうか

そこには 何が待っているのか

私の心は不安に揺れる

山を染める精霊は ここにいるのだろうか



やがて木々の姿は消え 見えるのは石ばかり

私の足は血に染まり もう歩けない

岩の陰に座りこみ 私は空を見あげる

「何故それほどまでに 恋人を追うのか」

不思議な声が語りかける

声の主が誰なのか 考えもせずに答えた

「わかりません ただ呼ばれているように感じるだけ」

そういうあなたは誰なのと 私は声に向かって問うてみた

「お前は私を探していたのではないのか？」

「あなたが山を染める精霊ですか？」

赤い瞳の精霊は ゆっくり私に頷いた



赤い瞳の精霊は 私をそっと頂上に立たせる

「見てごらん ここから海が良く見える」

ふらつく足を踏ん張って 私は精霊の指さす方を見た

遥か遠くに海が見える

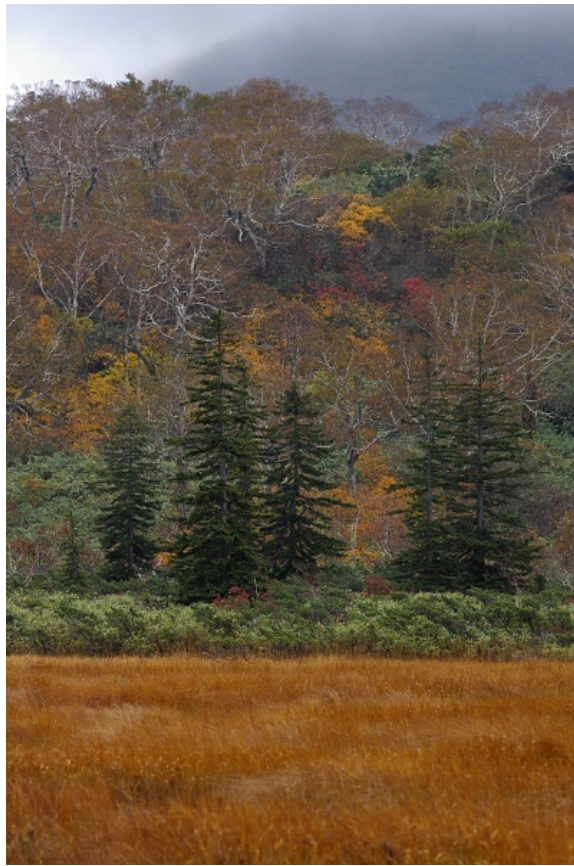
海の上には雲の合間から いくつもの光の道が降りていた

「あれは空からの お前への贈り物

お前の旅は もうすぐ終わる」

私は思わず精霊の顔を見た

赤い瞳の精霊は 私に優しく微笑んだ



残る力をふりしぼり 私は山を下った

そこはもう冬の気配 雪が降るのも近いだらう

秋の名残の 黄色や赤の葉が

今にも枝から離れそう

ここを過ぎればあの山が 二人で登ったあの山が

目の前に現れる

私の旅の終わる時が 私の旅の終わる場所が

目の前に現れる



北の大地の冬は早い

まだ色づいた葉が残るのに 冬は突然やってくる

赤い葉を震わせながら 初雪を被る姿が痛々しい

湿原を渡る精霊の 茶色の瞳を思いだす

ここにいればいつの日にか 恋しい人に会えるのか

しかし寒さは身を削る いつまで待ったら会えるのか

その時私の命は 燃えているのだろうか



川面にも 薄い氷が張るここに

人間を愛してしまった白鳥が ひっそりと暮らしていると

赤い瞳の精霊が 私に教えてくれた場所

今もここに住んでいるのだろうかと 心が痛む

私のように 孤独に耐えて生きているのだろうかと 胸がつまる

白い大地の精霊が 姿を現すその頃に

白鳥の仲間は戻るだろう

あてのないままここまで来た 私よりはずっと幸せだと

ふっとわが身を振り返る



私はここに 何故来たのだろうか

恋人を探すため？ そればかりではないと私は知っている

声が聞こえるから 私を呼ぶ声が聞こえるから ここまでやってきた

私は山を登り 森に足を踏み入れた

冷たい風が吹いた後 白い大地の精霊が 私の前に立っていた

「私を覚えているだろうか」

私はやっと理解した 嘗ての私の恋人は

今は白い瞳に白い衣で 私をじっと見つめている



「今の私はこの大地の 全ての命を守らねばならない」

白い大地の精霊は 白い瞳で私を見る

「私がお前と一緒に過ごせるのは 精霊としての使命が終わった時

その時私は光の粒子となる お前はそれまで待てるだろうか」

私は 白い瞳をしっかりと見つめて頷いた

「この雪の下にある 小さな木に身を寄せて

私が迎えに来るまで 待つがよい」

瞳を閉じて 私は雪の上に横たわる

私は小さな木に同化して 時が来るまで眠りにつく

-end-